

我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す

日本福祉大学、学長の建学の精神の言葉の中に「我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す」とあります。これは法華経・方便品第二にあります。私の著書「妙法蓮華経略義」の中では一一六頁、九〇に次の如く出ています。

「舍利弗、当に知るべし。我本誓願を立てて一切の衆をして、我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき。我が昔の所願の如き、今者已に満足しぬ」

「舍利弗よ、自分は仏陀伽耶において修行し、人生の深い意味を覚った。そして世間に出て教えを説いたが、その教えを説く初めから、是非自分が一生涯必ず成し遂げたいと誓願を立てた。その誓願は、一切衆生を教え導いて、自分と少しも変わらない仏にしてゆきたい、という願いである」

キリスト教では、「人間と神さまは別もので、人間は神さまにはなれない。イエスさまと

同じにはなれない。いつまでたっても人間は人間だ。一番偉くなったら天国に生まれて神さまのお傍に侍り得る者にはなるだろうけれども、神さまにはなれない」と言っています。論語には「上知と下愚は移らず」と言っています。「一番上の知恵のある者と、一番下の愚かな者とは代えられない。一番上の者は本当に偉い者で、一番下の者は駄目だ」と言うのです。

然るに仏さまは、一段と超越していられます。

「世の中にはいろいろな人がいるけれど、すべての人を等しく『自分と同じ仏にしてやろう』。それが自分の理想である」とおっしゃるのであります。

これは実に驚くべきことであり、実に広大無辺な大慈悲であると感謝するものであります。

へ私はそれ以来、宗教の王であることを感じ、すべてを打込む考えになった次第です。この大慈悲を考えます時、第一に自分を軽んじてはならぬということ。そして第二には、怒ったり、愚痴を言っただけのどんな恩知らずの者でも、仏に成れる者だ。自分もつ

と骨折ってやらねばならぬ。自分の努力にまだ欠けたところがある。もう一奮発しよう、という心持が起こってくるのであります。母親が、自分の子どもが重病の時、「我が命に代えても子どもの病を治したい」と、神さまや仏さまに祈る心と同じであって、これが大慈悲の心であります。

仏さまは、

「自分は昔から一切の人々を皆、我が子と思い、皆仏にしたいことを願っていたが、今ここで本当の心持ちである仏になる教え、法華経を説き聞かせることができ、その願望が満足したのである。これは、自分が一生涯の精神を明かしたものであるから、このことがすべての人に解りさえすれば、皆仏に成れるのだ」とおっしゃるのであります。

次の九一番に、

「一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」

とありますことも、この続きのお言葉であります。

「一切の人々を教化して、自分と同じ心、即ち、自分が仏と同じような心になるとともに、他の人々をも皆、仏と同じような大慈悲の心持ちとなるように導いて、世の中の人々が幸福に暮らし、極く楽しい生活をして、いつも大きな喜びを感じる者になるように。そして自分の骨折りにより、一切の人に喜びを与え、一切の人に満足を与えるように努力する道、即ち仏道に入らしめよう」

というのであります。本当に味わうべき偈であると思ひます。

参考までに「建学の精神」の全文を掲載しておきます。これは昭和二十八年正月、私が身延山の日蓮宗大荒行堂で修行中に書いたものであります。

建学の精神

日本福祉大学は、その根本精神として、高く清き宗教的信念に根をおろした教養が積まれる場所でありたいと願うのであります。社会事業の経営について研究すべきはもちろんであります。社会事業の専門的知識人を作ることよりも、永遠向上の世界観と、大慈大

愛に生きる人生観を把握した健全な人格を育て、広い世界的視野を持ちつつ、社会事業を通じてわが人類のために、自己を捧げることが惜しまぬ志の人を現実の社会に送り出したのであります。

今や新しい日本は、新しい文化的基盤を要求しております。それは、真・善・美・聖の精神文化、特に従来不振の状態にある聖—即ち、信仰を他にして奈辺にも見出し難いのであります。

この悩める時代の苦難に身を以って当たり、大慈悲心・大友愛心を身に負うて、社会の革新と進歩のために挺身する志の人を、この大学を中心として輩出させたいのであります。それは単なる学究ではなく、また、自己保身栄達のみに汲々たる気風ではなく、人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風が、本大学に満ち溢れたいものであります。

釈尊のお言葉、「我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す」、この一偈を、精神的根源としたいのであります。これぞ本大学学徒等の魂の奥底に鳴り響かすべき真理追求の基調でなければならぬのであります。